去る7月14日（水）、
チャリティー団体オンラインイベントを行いました。
今年度、日本人会が支援金を供与した9団体の中から、
虹の学校、アークどこでも本読み隊、
Wat Arun Community Learning Center に
ご参加いただき、タイ社会の中で何を目指し、
どのような活動をしているのか、
その中で寄付がいかに使われているのか、
そんなお話をしていただきました。

◎特集 オンラインイベント開催報告

タイ国日本人会が支援する チャリティー団体紹介

虹の学校

Wat Arun Community Learning Center

タイ国日本人会は、
タイ社会のために活動している福祉団体を
支援しています。支援金は1972年から開催してきた
チャリティーバザーで、会員・協賛企業の皆様の
物心両面のご協力により得られた純益を原資としたものです。
今年で50年の節目を迎えたチャリティーバザー。
その道程をp10「チャリティーバザーの歩み」で振り返りました。

アークどこでも本読み隊

RAINBOW SCHOOL

虹の学校

山地民の孤児や貧困家庭の子どもたちが共に暮らして学ぶオルタナティブ教育の学習センター

虹の学校はカンチャナブリ県にある児童養護施設兼小学校です。タイ・ミャンマー国境にまたがって暮らす少数民族の子どもたちを受け入れて、自然とテクノロジーが調和した、良き循環する生き方を模索し実践しながら学び、生活を共にしています。

私たちは２００８年から活動を開始して２０１４年にタイ政府公認の学習センターとして登録しました。６年間の学習を終えた子どもたちは小学校課程を修了することができます。修了後は虹の学校を寄宿舎として、近隣の公立中学高校や定時制の中学高校に通い学業を継続します。

児童は現在31名、先生は６名で、校長の私を含めて７名です。運営元は高知県高法寺の住職、玉城英大さんです。

虹の学校のミッションは一言で言うと、虹色の架け橋で美しい地球を未来につなぐということ。ネイティブアメリカンの人たちには「７世代先のことを考えて生きよう」という考え方があり、私はそれに衝撃を受け、未来の地球を考えて今を生きるというような、そんな謙虚で聡明な生き方を見習っていきたいと考えています。それから生きとし生けるものそれぞれが、その命と個々の色を尊重し合って未来につないでいけたらという、そんなミッションを掲げています。

学校は、月曜から木曜日には全教科（算数・タイ語・英語・日本語・理科・社会・家庭科・美術）をカリキュラムに沿って進め、金曜日は子どもたちが好きなことに取り組むレインボーデーという時間です。あとはＥＳＤ（持続可能な発展のための教育）の時間を取っています。

校長の片岡朋子さん

虹の学校の生活は、毎朝５時半の鐘の音で始まります。食事当番の子は朝食を作り、他の子は草引きとか、畑の手入れや掃除や鶏の世話など仕事を分担して行い、共同生活を学んでいます。

虹の学校には「稲作」と「森合宿」という二本の柱があります。稲作は地域の米作りの文化に倣って機械を使わず手で行っています。村の皆さんと協力して、子どもたちも田植えや稲刈りすべて手で行なっているんです。大体半年分ぐらいは自給することができています。

もう一本の柱が森合宿です。山岳民族の文化である森で生きる力を養います。虹の学校のスタッフである大工さんたちに引率してもらい、５泊６日を森の中で過ごすというアクティビティを毎年１回行っています。子どもたちは、魚を捕ったり、野草を採ったり、それを料理したり、自分たちで寝床を作ったり。そういう技術を森で身につけます。

構成（p6-9）/ムシカシントーン小河修子

子ども一人一人の個性を伸ばし、自分らしい夢を描く

サポートをすること、その夢を叶えるサポートをすること、

彼らが本来備えている優しさと美しさを大事に育てること、

元気に幸せに生きてもらうこと

森合宿

虹の学校の子どもがなぜ無国籍なのか、また少数民族や無国籍の方たちの現状についてお話ししたいと思います。無国籍になる理由はたくさんありますが、私が把握しているのは次の四つです。①山岳少数民族の社会で出生届の制度や習慣がなかった。②自宅出産などで出生証明書が手に入らなかった。③ミャンマーの内戦から逃れてタイ側に来たため、タイ国籍を取る資格がないという方もたくさんいます。④ミャンマーに帰れば取れるが、子どもたちにタイで生きて欲しいため、あえてミャンマー国籍を取らないという家庭もあります。

無国籍であることの弊害についてですが、まず移動の制限があります。サンカブリ郡はミャンマーと国境を接しており特別な地域と認められていますが、サンカブリから出る場合は役所への届け出が必要で許可が下りなければ出られません。もし許可なしで行ったら捕まってしまいます。それから福利厚生が受けられません。病院代も全部払わなくてはいけないし、奨学金も受けられない。保障も受けられないといった支障があります。

子どもたちの親はタイ語の読み書きができない人がほとんどで、そのためゴムのプランテーションなどで日雇い労働していることが多いのですが、重労働で賃金も安く、月額で6000バーツから1万バーツくらいです。仕事がないときは他の日雇いを探したり、山菜を採って売ったりして凌いでいます。

またプランテーションは転々と移動させる場合があるので、子どもを一定の学校に通学させることが難しい。家庭の教育環境が整っていないため、子どもたちの教育レベルが上がりにくく、それで貧困のループが繰り返されてしまう。貧困や教育環境により大学進学まで至る人は稀です。タイ国籍を取得できずに不利な条件で生きていくしかない方がまだまだたくさんいるというのが現状です。

最後に虹の学校のサポート方法についてお話しさせていただきます。これまでご寄付に頼っていたのですが、コロナの影響で途絶えてしまい、今年2月に里親制度を立ち上げました。月々1000円（タイバーツは300バーツ）から子ども一人を応援することができます。

他には子どもたちと作っているNIJIブランドのハーブティーや竹布製品の購入でもサポートしていただけます。食品や絵本、運動着、パソコンなど必要なものを送っていただく物資の支援もありがたいです。SNSのフォローやシェアもうれしいです。

最後になりましたが、今年度、日本人会チャリティーバザー基金からいただいたご寄付は、学校のスタッフの人件費として使わせていただいております。ありがとうございました。

竹布製品

虹の学校HP　虹の学校FB　インスタグラム　YouTube　里親・寄付

Bookworm Foundation

アークどこでも本読み隊

どんなバックグラウンドの子どもにも大人にも読書の喜びを届けたい チェンマイの山間地で図書活動

移動図書館の中の様子

大人も利用しています

月に一度、ランマイ図書館を開放して工作や料理、読み聞かせなど。地元の高校生ボランティアがお手伝い

移動図書館「はるの号」の前で本の読み聞かせ

アークどこでも本読み隊はチェンマイ県北部のプラオ郡というところにあります。県の中心から100キロぐらい離れた結構な田舎で、アクセスがあんまり良くないところです。私たちの活動は読書支援ですが、ただ単に本を読んでくださいという団体ではなくて、楽しい読書を広めることをミッションにしています。といいますのも、タイの人たちは、本は勉強のためだとか賢い人間になるための道具だと思っている方が非常に多くて、その思い込みを壊してしまいたいと私たちは思っています。そのために三つの活動を行っています。

一つ目が図書館活動です。プラオ郡にあるランマイ図書館を中心にした活動です。移動図書館なども行なっています。

二つ目は幼児教育センターです。当初は山の方でも図書館活動しようと思っていたら、皆さんタイ語があまりにも話せなくて、本を持っていっても仕方がないということで始めたのが幼児教育センターです。山岳民族の子どもたちはタイ語ではない言語を母語として育っている子がほとんどで、そういった子どもたちに就学前までの間にタイ語に親しんだり数字に親しんだりしてもらうような、幼稚園と保育園を足して二で割ったようなところです。

最後に「でこぼこ絵本」制作。これは唯一バンコクを中心に行なっている活動で、ユニバーサルデザイン絵本を作って配ったり売ったりするというプロジェクトです。こちらはまだ試行錯誤しているところです。

私は全盲なので、読書推進をする団体をやっているわりに絵本を読んでもらった体験がほとんどないという不思議な人間です。けれど、障がいがあってもなくても、家族で絵本を楽しむ体験ができればいいなと思ったのが、このでこぼこ絵本プロジェクトの始まりです。

日本人会のチャリティー基金からいただいた寄付は、事務業務と幼児教育センターの先生たちのサポートを主な仕事にしているスタッフの1年分の給料に使わせていただいています。ありがとうございました。

●今年2月に「アークの会」という資金サポートの会を立ち上げました

※1　ボランティアに関しては、でこぼこ絵本のパーツ制作をはじめいろいろありますので、メールなどでご連絡ください※2

(右) 代表の堀内佳美さん (左) スタッフのニックさん。チェンマイ県プラオ郡のランマイ図書館を中継で案内してくれました

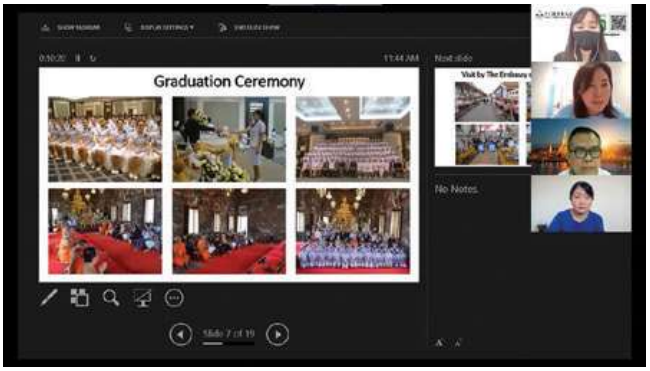
※1「アークの会」入会申し込みは左のQRコードから（年会費1000バーツ、日本円の場合3000円）
※2 mail：club@alwaysreadingcaravan.org

Wat Arun Community Learning Center

人身取引被害予防のため 貧困層の少女たちに専門教育 病院勤務の看護助手に

看護助手の制服を披露してくれた奨学生。前列左から２人目が在学中だったナームさん

（右）初めて支援した2019年の授与式の日、地方から来たばかりの奨学生が日タイの国旗を手にセンターの前で迎えてくれた　（左上）奨学生たちはセンターでタイ舞踊などの伝統文化も学ぶ　（左下）日本文化を伝える交流会を有志が行っている



サイアム大学の卒業式。下段は教育省などの支援によりタイ王室によって執り行われるワットアルンでの卒業式

Wat Arun Community Learning Centerは、人身取引被害やドメスティックバイオレンス、麻薬などの被害者となる可能性の高い若者や子どもを守るための活動をしている団体です。

タイの教育省の認可を受けて、ワットアルン（暁の寺）の敷地内にあるセンターで、ノンフォーマル教育を行なっています。施設は２００６年にアメリカから支援を受けて建設されました。ワットアルンは世界遺産に登録されているため、建物の建設に制限があるので、地下に教室を作ったりしています。昨年は在タイ日本国大使館の草の根援助で地下教室の改修を行うことができました。

私たちは、貧困や周囲の環境により教育を平等に受けられない子どもたちに教育の機会を与え、正当な仕事に就業できるように無償でサポートしています。近隣のスラムの子どもたちも当センターに来て、英語などを学んでいるのですが、その子たちの親は少なからず麻薬や家庭問題を抱えています。私たちは道徳教育も重要と考え、精神鍛錬にも力を入れています。

当センターの取り組みで、効果の高さから評価されているのが、人身取引被害予防のための看護生プログラムです。貧困や家庭環境などから被害リスクの高い少女を高卒後に寄宿生として受け入れ、サイアム大学の看護助手課程で１年間学ぶ機会を供与し、卒業後はトンブリ病院に就職するコースです。

毎年10人～15人受け入れていますが、２０１９年から１人分の奨学金をタイ国日本人会が支援してくださっています。寄付は学校の授業料や制服、交通費などに使用しています。日本人会のサポートでこれまで２人が卒業して看護助手になり、３人目が在学中です。今日は最初の奨学生ナームさんに参加してもらいました。

「こんにちは。ナームです。卒業後は看護助手として病院に勤め、実家に仕送りすることもできるようになりました。ご支援くださった日本人会の皆様に心から感謝しています。ありがとうございました」

（右）代表のハルタント・グナワンさん
（左）日本人会の支援第１回目の奨学生ナームさんは看護助手になって２年目。ズームイベントに登場

お問い合わせ mail:chalotte160284@gmail.com（Mayuree Kojirapan 英語・タイ語）
写真（Zoom画面以外）／ムシカシントーン小河修子